

幼稚園教育における課題保育と自由保育の一考察

飛 田 隆

1. はじめに

現在の幼稚園教育要領（平成20年告示）に具体的な記述はないが幼稚園教育の中にある保育の分け方のひとつとして課題保育（一斉保育と表現されることもある）と自由保育（自由遊びと表現されることもある）という考え方がある。自由保育というのは子ども達が自由に遊んでよい時間と考えられている。この中で制限されるのは場所と時間と危険な行為や他の子どもに迷惑をかけてはいけないことぐらいであると思う。そのことさえ守ればたとえ何をしても、またしなくても、教員から特に指導されることはない時間である。しかしながら放任ではないと考えられているので自由保育も教員が考えた指導計画の中に含まれている。

課題保育とは教員が遊びの内容を考え決められた時間教員が主体的に指導し、原則としてクラス全員が教員の立てた指導案に添って遊ぶことと考えられている。原則というのは子どもによっては活動したくないという意見も出ることがあり、その場合には無理せずに見ている参加や同じ部屋にいれば一定の時間は認められるという柔軟さがあるので、時には教員から促されて参加する場合もある。教員が課題保育を行う理由には「どの子どもにも『平等に保育をしたい』という保育者の願いから、あるいは一人の保育者に対する子どもの受け持ち人数の多さから安全性を確保するために一斉保育の形態がとられた園は多かった」⁽¹⁾ 多くの場合課題保育は幼稚園の保育計画に基づいて考えられる。園児一人一人の興味関心等や発達課題を考え子どもの様子がわかる担任が指導案を考えることになっている。そこには教員の願いも含め子どもの発達にとって必要だと考えられることを課題保育に取り入れていることが多い。

この課題保育の考え方に一部の教員からは幼稚園教育要領の中にある考えかたの自発的な活動としての遊びと矛盾するのではないかとの意見もある。教員が課題保育を行う理由として「一斉保育では、ひとりの保育者が多くの幼児を計画的・能率的に指導できるという利点があり、幼児全員に共通の経験や活動させるのに適しているが、幼児の興味や欲求よりも保育者の意図が先行するため、強制的な押し付けになりやすく、個人差が無視される危険がある。」⁽²⁾ との考え方もある。確かに教員の指導の下決められた遊びをクラス一斉に行うということから考えればクラスの子ども全員に共通の体験や遊びの提供が出来るという安心感がある。その反面教員が中心になっての指導であり自発的な活動としての遊びにあたらぬという考え方も理解できる。しかしながら現在の幼稚園では課題保育を前提とするような形態がとられている。多くの幼稚園では学齢別保育という同一年齢でクラスを構成する方法をとっている「幼稚園設置基準」においても年齢別保育が原則となっている。考え方としては「一般常識では、同年齢であれば発達の程度も近似していると考えら

れる。年齢別保育は、学級の幼児が一斉に同一の活動をできるように発達程度にあまり差のない同年齢の幼児で学習単位を編成し、一斉保育による教授・学習の効率を考えたシステムである。学齢別保育は、学習能力の発達能力にかかわらず、すべての同一年齢の幼児に平等な教育を行う手段ともみなされる。』⁽³⁾ 考え方としては子どもたちが自由に遊んでいる姿から教員が観察し子どもの興味、関心を知り、そのことを踏まえたうえで共通の発達課題であると考えた遊びを課題保育として計画し実践しているのであれば自由遊びに近くなるとの考え方もできる。また教員としては子どもたちが課題保育で獲得したことが刺激となって次に遊ぶ時にそのことが生かされていくと考えているので自由遊びと課題保育のつながりの中で「自発的な活動としての遊び」が担保されていると考えられている。

茨城キリスト教大学紀要第47号（2013.12）「子どもの遊びの中にある学びについての一考察」⁽⁴⁾のなかで同じような趣旨で触れたが、本稿ではこの課題保育と自由保育についてもう少し整理して考えたい。また幼稚園教育の中での子どもの「課題」についても併せて考えたい。

2. 教育課程

課題保育も自由保育も教育課程の中に含まれるので、教育課程について考えたい。教育課程とは教育目標を含む教育計画であるが、現在の幼稚園教育要領の第2. 教育課程の編成には以下のように書かれている。

幼稚園は、家庭との連携を図りながら、この第1に示す幼稚園教育の基本に基づいて展開される幼稚園生活を通して、生きる力の基礎を育成するよう学校教育法第23条に規定する幼稚園教育の目標の達成に務めなければならない。幼稚園は、このことにより、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとする。

これらを踏まえ、各幼稚園においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの幼稚園教育要領の示すところに従い、創意工夫を生かし、幼児の心身の発達と幼稚園及び地域の実態に即応した適切な教育課程を編成するものとする。

- 1 幼稚園生活の全体を通して第2章に示すねらいが総合的に達成されるよう、教育課程に係る教育期間や幼児の生活経験や発達の過程などを考慮して具体的なねらいと内容を組織しなければならないこと。この場合においては、特に、自我が芽生え、他者の存在を意識し、自己を抑制しようとする気持ちが生まれる幼児期の発達の特性を踏まえ、入園から修了に至るまでの長期的な視野をもって充実した生活が展開できるように配慮しなければならないこと。
- 2 幼稚園の毎学年の教育課程に係る教育週数は、特別の事情のある場合を除き、39週を下ってはならないこと。
- 3 幼稚園の1日の教育課程に係る教育時間は、4時間を標準とすること。ただし、幼児の心身の発達の程度や季節などに適切に配慮すること。⁽⁵⁾

このように教育課程の編成にあたっては家庭との連携、生きる力の基礎を育成すること義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとする⁽⁵⁾と示されている。また「教育基本法」、

「学校教育法」、「幼稚園教育要領」等の関連法規をもとに各園が創意工夫を生かし、幼児の心身の発達と地域の実態に即応した適切な教育課程を編成するものとなっている。具体的には第2章に示すねらいが総合的に達成されることや幼児の生活経験や発達の過程などを考慮することが挙げられている。また幼稚園教育要領（平成20年告示）の第2章には以下のように書かれている。

第2章ねらい及び内容

この章に示すねらいは、幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などであり、内容は、ねらいを達成するために指導する事項である。これらを幼児の発達の側面から、心身の健康に関する領域「健康」、人とのかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」としてまとめ、示したものである。

各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること、内容は、幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない。

なお、特に必要な場合には、各領域に示すねらいの趣旨に基づいて適切な、具体的な内容を工夫し、それを加えても差し支えないが、その場合には、それが第1章に示す幼稚園教育の基本を逸脱しないよう慎重に配慮する必要がある。⁽⁶⁾

幼稚園修了までに期待される生きる力や各領域に示されているねらいや内容を通して達成するための指導事項となっている。幼稚園生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであり、また内容は、幼児が環境にかかわる中で具体的、総合的に指導するように留意することとしている。指導計画に対して違う考えもある「保育に計画を立てることに対して、否定的、消極的な意見もあります。計画を立てるとそれに子どもを当てはめようとして大人主導になり、子どもの主体性を奪うといった考え方です。」⁽⁷⁾ 自由保育を行うときの考え方のひとつとしてこのような意見を述べる教員もいる。しかしながら教育課程、指導計画を立てないで教育をすればどうなるであろうか、「こうした場合、先の見通しが持てず、いつも子どもの要求に流されて、重要な経験の場を逃してしまうかもしれません。また幼児期にはそれぞれの発達段階に沿った課題がありますが、その課題が把握されないことで、遊びが高度すぎたり、反対に面白みに欠けたりと、子どもの発達にそぐわない保育を行ってしまう危険もあります。このような理由から、教育課程を編成するという事は、重要な意味を持つと言えるでしょう」⁽⁸⁾ しかし文部科学省の「幼稚園教育要領解説」（平成20年10月）には以下のような説明がある。

1 教育課程の編成の基本

(1) 義務教育及びその後の教育の基礎を培うこと

例えば幼稚園においては、幼児はそれぞれの興味や関心に応じ、直接・具体的な体験などを通じて幼児なりのやり方で学んでいくものであって、小学校以降の学習と異なり、教師があらかじめ立てた目的に沿って、順序立てて言葉で教えられ学習するのではない。幼児が、遊びを通じて、学ぶことの楽しさを知り、積極的に物事にかかわろうとする気持ちをもつようになる過程こそ、小学校以降の学習意欲へとつながり、さらには、社会に出てからも物事に主体的に取り組み、自ら考え、様々な問題に対応し、解決していくようになっていく。幼児期に多様な体験をし、様々なことに興味や関心を広げ、それらに自らかかわろうとする気持ちをもつことは、幼児期からはぐくむことが重要である。⁽⁹⁾

この説明を素直に読めば指導計画は作成しない方が良いと考えられるのではないかと思う。また「教師があらかじめ立てた目的に沿って、順序立てて言葉で教えられ学習するのではない。」⁽⁹⁾ との記載があるが教育課程はない方が良いのだろうか、同じ「幼稚園教育要領解説」(平成20年10月)の中には以下のような説明もある。

(2) 教育課程の編成の原則

教育課程の編成に当たっては、国立、公立、私立を問わず、すべての幼稚園に対して、公教育の立場から、教育基本法や学校教育法などの法令や幼稚園教育要領により種々の定めがなされているので、これらに従って編成しなければならない。その際、幼稚園の長たる園長は、幼稚園全体の責任者として指導性を発揮し、全教職員の協力の下、以下の点を踏まえつつ編成しなければならない。

(ア) 幼児の心身の発達

幼稚園において教育課程を編成する場合には、幼児の調和のとれた発達を図るという観点から、幼児の発達の見通しなどをもち、教育課程を編成することが必要である。

(イ), (ウ), (エ) 筆者省略⁽¹⁰⁾

このようにすべての幼稚園において園長が全体の責任者として全教職員の協力の下教育課程の編成することになっている。また教育課程は(ア)「幼児の心身の発達」や上記では省略したが(イ)「幼稚園の実態」、(ウ)「地域の実態」、(エ)「創意工夫を生かすこと」を踏まえながら編成することになっている。では「1 教育課程の編成の基本 (1) 義務教育及びその後の教育の基礎を培うこと」の中での「幼児はそれぞれの興味や関心に応じ、直接・具体的な体験などを通じて幼児なりのやり方で学んでいくものであって、小学校以降の学習と異なり、教師があらかじめ立てた目的に沿って、順序立てて言葉で教えられ学習するのではない。」⁽⁹⁾ の記載についてどう理解すればよいのだろうか、同じく解説の中で教育課程編成の意義について以下のように記載されている。

2 教育課程の編成

(1) 教育課程の意義

幼稚園は意図的な教育を目的としている学校であり、幼稚園教育の基本に基づいて展開される幼児期にふさわしい生活を通して、幼稚園教育の目的や目標の達成に努めることが必要である。このため、幼児の発達を見通し、その発達が可能となるよう、それぞれの時期に必要な教育内容を明らかにし、計画性のある指導を行うことが求められる。

このような意味から、それぞれの幼稚園は、その幼稚園における教育期間の全体にわたって幼稚園教育の目的、目標に向かってどのような道筋をたどって教育を進めていくかを明らかにし、幼児の充実した生活を展開できるような全体計画を示す教育課程を編成して教育を行う必要がある。

教育課程の実施に当たっては、幼稚園教育の基本である環境を通して行う教育の趣旨に基づいて、幼児の発達や生活の実情などに応じた具体的な指導の順序や方法をあらかじめ定めた指導計画を作成して教育を行う必要があり、教育課程は指導計画を立案する際の骨格となるものである。⁽¹¹⁾

以上のことを踏まえると教育課程の編成に当たっては、すべての幼稚園に対して、関係法令や幼稚園教育要領により種々の定めに従って編成しなければならないということになる。また幼稚園生活の全体を通じ様々な体験を積み重ねる中で達成に向かうものであること、幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意することになっている。そのため幼稚園における教育期間の全体にわたって教育の目的、目標に向かってどのような道筋をたどって教育を進めていくかを明らかにし、全体計画がわかるように教育課程を編成して教育を行う必要がある。

教員は以上のことを意識しながら子どものそれぞれの興味や関心に応じ具体的な体験などを通じて子どもなりのやり方で学んでいくことを理解しておく必要がある。子どもが遊びを通じて、学ぶことの楽しさを知り、積極的に物事にかかわろうとする気持ちをもつようになる過程を捉え教育課程を考えることが大切になる。

3. 課題保育をどう考えるか

幼稚園教育の中で教員は子どもの「課題」をどう捉えるのであろうか、例えば子どもの状態を見てまだできていないことや未経験なこと、あるいは経験していても教員が考える状態に到達していないときに「課題」として計画の中に位置づけその「課題」を達成するためのひとつの方法として課題保育を行うのではないかと考える。

子どもの「課題」について例を挙げて考えてみたい。

3歳児のA君は室内でのブロック遊びが好きで毎日のように遊んでいる。いつも遊んでいるのでブロックで作るものはとても上手で車、家、電車やタワー等を作り遊んでいる。クラスの子どもの中にはA君の作るものに興味を持ちブロック遊びに入ることもあるがA君と遊ぶというよりブロックの魅力やA君の作るものに興味を持って遊びに入ってくるこ

とが多い。そのせいか特定の友達ではなく毎回違う子どもとの触れ合いになる。遊んでいる子ども同士の会話が深まるわけでもなく会話が続くことも少ないがA君はそのことを気にしている様子は見られない。一見するとA君はブロックに興味や関心を持ち自発的に遊んでいると思えるがこのままでよいのだろうか、教員が幼稚園教育要領（平成20年告示）を手掛かりに考えると「課題」が見えてくる。各領域から関係のある項目を抜粋してA君の「課題」について予想されることを考えたい。

【健康】 1. ねらい (2)自分の体を十分動かし、進んで運動しようとする。2. 内容 (2)いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。(3)進んで戸外で遊ぶ。(4)様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。⁽¹²⁾

ねらいの (2) を意識すれば室内でのブロック遊びばかりでは十分体を動かしているとは考えられないし戸外で遊ぶことにはなっていない。また様々な活動に親しみという点でも問題がある。

【人間関係】 1. ねらい (2)身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。2. 内容 (4)いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。(5)友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。⁽¹³⁾

ブロック遊びを通じてクラスの子ども達との交流はあるが領域「人間関係」のねらいで考えるとかかわりを深め、愛情や信頼感をもつところまでにはなっていない。また内容の「いろいろな遊びを楽しむ」や「友達と積極的にかかわりながら」ということに至っていないことがわかる。

【環境】 1. ねらい (1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。2. 内容 (1)自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。(2)生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。(3)季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。(4)自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。(5)身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。⁽¹⁴⁾

ねらいの (1) や内容の (1) は室内遊びが中心の場合には自然と触れ合いや様々な事象への興味や関心をもつことが希薄になる。また内容の (2) を考えると一つの遊びを繰り返して過ごしている場合には様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつたりすることが少なくなると考えられる。内容の (4), (5) は自然や動植物との直接的な体験を通して身につくと考えられるので毎日ブロック遊びを繰り返していても生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりすることにはつながらない。

【言葉】 1. ねらい (1)自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。(2)人の言葉や話しなどをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。(3)日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。2. 内容 (8)いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。(9)絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。⁽¹⁵⁾

ブロックでの遊びは友達との触れ合はあまりなく一人で作る活動が中心では子ども同士との会話は限定的なものになるのではないかと思う。だとするとねらいの (1) の言葉で表現する楽しさや (2) の伝え合う喜びを味わうという経験は少ないことが予想される。また (3) の絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせることは難しい状況ではないかと考える。また内容の (8) いろいろな体験については出来ていないことになる。(9) 絵本や物語などに親しむという体験も少ないことが考えられる。

【表現】 1. ねらい (1)いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。2. 内容 (1)生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。(4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。(5)いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。(6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。(7)かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。⁽¹⁶⁾

ねらい (1) を意識してみたとき毎日同じ遊びの繰り返しでは、いろいろなものの美しさに気付くことはできないし豊かな感性につながっていかないと考えられる。また内容の (1) の様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたりするためには多様な遊びの体験が必要になる。(4) で示されている感じたこと、考えたことなどを遊びの中で体験するためには (5)、(6) や (7) で示されていることを実践する中で身につくことができると考える。

以上のことを踏まえると子どもの自発的な活動である遊びは教員が大切にしなければならぬが常にそのままの状態子どもに任せていてよいというものではないことが考えられる。子どもの「遊び」と「課題」の関係について考えたい。「とかく、『遊び』は自由形態であり、『課題』は一斉形態である」といったとらえ方をされがちですが、これは誤りだと思います。活動の形態というものは、その時の子どもにとって最も適した状態として、あるいは必要性から、あるいは必然的な結果として、一つの形態が選択されるものです。ですから当然、『課題』はイコール一斉形態、というような考え方ではないことは、おわかりいただけると思います。この点においても、『遊び』というものが、形態的にも、『課題』による活動と対立するなどという考え方をすべきでないことがはっきりしてきます。『遊び』は子どもにとって、自由なものであり、形態的にも、自由な形態であって、

『課題』による活動は子どもにとっては不自由な状態で、受け身の一斉形態であるといった一方的な考え方をすべきではありません。』⁽¹⁷⁾ 子どもの「課題」を明らかにするためには教育課程の中でどのような子どもに育ってほしいかの願いを明確にして全体計画を作成することが必要になる。子どもの「課題」を取り上げるとき課題保育を計画して行うことがあるが一斉にクラスの中で取り上げる場合だけでなく個別にA君の課題として個人の子どもを対象に実践することもある。柔軟な考え方で日々の保育の中でいかにそのねらいを達成すべきか考え計画を立てておくことは大切である。その計画があるからこそ子どもの自発的な遊びだけでは「課題」が賄いきれない場合があることがわかる。子どもが自由に遊べる環境や雰囲気は大切にしながら子ども全体の発達を保障することが大切になる。

子どもの自発的な遊びを大切にしながら、子どもの「課題」を見逃さないようにする指導計画が必要であり子どもの自由な遊びを担保する方法のひとつとして課題保育をとらえることができると考えられる。しかしながら課題保育を行う場合には教員の意図や計画が前面に出る危険もある。また子どもの側から考えると教員からの指導が中心になることが多いので指示待ちの受動的な姿勢になることも考えられる。一斉に行う場合には個人差が軽んじられたり、集団の平均的な子どもに合わせるようになったりする可能性があることを教員は意識する必要がある。

4. 自由保育をどう考えるか

自由保育というのは子ども達が自由に遊んでよい時間と考えられている。しかしながらその自由保育の時間は教員が設定した時間の中で行われる。つまり教員が指導計画を立てた中に含まれる時間になる。「自由保育とは、子どもの自主性にまかせて、子どもの個性が十分に発揮できるように子どもに援助することが主な流れになる保育です。そのため、外部からの拘束をしないよう、『自由』を奪わないようにすることが必要になります。』⁽¹⁸⁾ 教員は子どもにとって自由な時間の必要性を考えていることが大切になる。「子どもたちの活動が展開するかどうかの判断は、保育者に任されています。まかされている以上、保育者は精一杯の努力をしなければなりません。子どもの遊びをぼんやりと眺めているとか、ほかの仕事をしながら、単に見ている、といった保育者の態度は、責任を果たしていないというべきです。それは、放任という最も好ましくない保育に墮落している、といってもよいでしょう。その際の子どもたちの行動には『自由』があっても、教育的観点からすれば、放任といえます。』⁽¹⁹⁾ 自由保育時間の教員の役割は何か現在の幼稚園教育要領を手掛かりに考えたい。

幼稚園教育要領（平成20年告示）第1章総則第1 幼稚園教育の基本

幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。

このため、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。これらを踏まえ、次に示す事項を重視して教育を行わなければならない。

- 1 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
- 2 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。
- 3 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。

その際、教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予測に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとのかわりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、教師は、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。⁽²⁰⁾

現在の幼稚園教育要領の第1章総則第1幼稚園教育の基本には幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うことが示されている。また教師は幼児との信頼関係を十分に築くことになっている。そして幼児と共によりよい教育環境を創造するように求められている。このことは教員が子どもを信頼し子どもにとってよりよい環境を整備することと考えられる。そのうえで幼児の主体的な活動を促すことが幼児期にふさわしい生活になると考えられている。このことを踏まえながら教員は教育課程を作成する必要があるこの中に自由保育も含まれる。

第2. 教育課程の編成には、幼児の生活経験や発達の過程などを考慮して具体的なねらいと内容を組織しなければならないことや幼児期の発達の特性を踏まえ長期的な視野をもって充実した生活が展開できるように配慮しなければならないことが示されている。

教員は以上のことを踏まえながら教育課程に基づき長期的な計画である全体計画や年間計画、学期計画、月の計画また短期計画である週案、日案を作成することが基本になる。その中で園全体の教育目標とクラス集団の目標、ねらいを考えながら子ども一人一人の目標やねらいを明確にしておくことが大切になる。ただし指導計画はあくまで予測であり仮定の計画であることを踏まえ子どもを計画に合わせるような強引な教育をしてはならないということを忘れず教員は常に心に留めておく必要がある。

自由保育を計画し行うことは先に触れた幼児と共によりよい教育環境を創造するなかに含まれると考えられる。自由保育を計画する教員は子どもをどうとらえるべきか「子ども自身に内在している自主性を、全面的に信頼することです。それによって、自主性の発達が可能となります。子どもたちは、保育者から信頼されることによって、自主性を伸ばすことができますし、子どもが意識するかどうかははっきりしませんが、信頼に答える自主的な活動を増していきます。この自主性は、意欲を育てる源泉です。自主性の発達している子どもは、いきいきと活動しています。いきいきしている状態は、子どもの目の輝きや

表情にも表れますし、行動にも表れています。』⁽²¹⁾ 自由保育を計画し行うときの大切なことは子どもへの信頼である。それは教員の一方的な思いだけではなく、子どもと触れ合い向き合う中でのお互いの信頼関係の構築が基本になる。

現在の幼稚園教育要領には幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であるとの記載がある。このことを踏まえれば教員は子どもの自発的な時間の確保を考えたとき自由保育の中で子どもの自発的な遊びが広がることを把握し、子ども一人一人の特性に応じた発達の課題に即した指導を行うようにすることが大切になる。また主体的な活動が確保されるよう計画的に環境を構成することが重要になる。

自由保育はたんに子どもに自由な時間を与えることではなく、上記のことを踏まえることで自由保育の教育的成果が期待できるということを教員は意識することが大切である。

5. おわりに

課題保育と自由保育のどちらの保育を行う場合でも教育課程の中で子どもにとっての「課題」を押さえておくことが必要である。そのとき教員が必要を感じて子どもに与える「課題」は少なくとも子どもの興味や関心のあることを意識しておかなければならない。また子どもの発達課題に合ったものであるかも確認しておく必要がある。「発達課題というものを考えていく場合、まず、子どもの発達が、どのような分野にわたって、どのような筋道を通っていくのかを、綿密に検討してみる必要があると思います。たとえば、身体的な発達というものは、幼児期にあってはどのようなものなのかということがあります。これまで、筋の持久力や、敏捷性、平衡感覚などを伸ばすことが大事だといわれてきましたが、最近では、むしろ幼児の場合は、調整する力とか、神経回路をしっかりと発達させ、スムーズな動きができるようにすることがたいせつだといわれています。また、それに伴う基礎的な運動技能も身につけさせる必要があるということです。これは、一つの発達の「課題」だと思えます。』⁽²²⁾ この他にも幼稚園教育の中で子どもの「課題」を取り上げる場合にはいくつか大切にすることがあると考える。「一つは、『課題』が子どもを受け身の状態にするものであってはならないということです。そのためには、まず第一に、『課題』が、子どもの欲求と密接な関わりをもっていることが大切です。第二には、欲求と似ているのですが、子どもが何に興味をもっているかを、把握したうえで、『課題』というものを考えなければならないということです。第三には、子どもがどの場面で創造性を発揮しうるのかを、考えておかなければならないということです。つまり、子どもが自分自身で考え、行動できる部分が『課題』による活動においても必要だということです。『遊び』では、よく自己実現とか、自己表現活動ということがいわれますが、『課題』に向かって活動する場合にも、そうしたものが大事なわけです。』⁽²³⁾ 課題保育を実践するときには子どもの欲求と興味関心を基にして計画されることが大切である。教員は子どもの発達課題を考えながら子どもにとっては自由保育の遊びの中でも「課題」が身につくように環境を意識しながら計画し実践すべきである。

例えばハサミの使い方も子どもにまかせておけば子ども全員が同じような時期にいつの間にか使えるようになるということはないと考える。しかし子どもが必要を感じていないときに一斉に指導するとまったく興味をもたない子どもも出てくることがあるので注意

が必要である。道具の使い方を覚える必要性を子どもが感じられるように教員は自由保育の中で環境を意識してハサミを身近に準備するなどして意図的に計画をすることが大切である。自由保育の中で数人の子どもが自発的に教員にハサミの使い方を教えてもらい遊ぶことで、他の子どもも興味や関心をもつ場合もある。また道具の使い方を覚えたら便利で出来ることが増えたとの実感を子どもに持たせる活動を課題保育として次に計画しておくことも大切である。

幼稚園教育における課題保育と自由保育について考察してきた。課題保育も自由保育も相反する保育ではなく関連させながら教育課程の中に位置付け、子どもの主体的な遊びを尊重しながら実践していくことで子ども一人一人の育ちを保障することにつながる保育であると考えられる。両方の保育形態を計画的に実践することで子どもの「課題」が無理なく遊びを中心とした中で獲得されるようにすることが教員の役割だと考える。

引用文献

1. 勅使千鶴「子どもの発達とあそびの指導」ひとなる書房 2010年 91頁
2. 森しげる 監修「ちょっと変わった幼児学用語集」北大路書房 2000年 78頁
3. 同上 88頁
4. 飛田隆「茨城キリスト教大学紀要第47号子どもの遊びの中にある学びについての一考察」2013年
5. 文部科学省「幼稚園教育要領（平成20年告示）」フレーベル館 4, 5頁
6. 同上 6頁
7. 林秀雄 編「豊かな保育をめざす教育課程・保育課程」みらい 2011年 33頁
8. 同上 33頁
9. 文部科学省「幼稚園教育要領解説」（平成20年10月） 51, 52頁
10. 同上 52頁
11. 同上 54頁
12. 文部科学省「幼稚園教育要領（平成20年告示）」フレーベル館 6頁
13. 同上 7, 8頁
14. 同上 9頁
15. 同上 10, 11頁
16. 同上 11, 12頁
17. 大場牧夫・海卓子・平井信義・本吉圓子・森上史郎「これからの保育一3 「課題」とは何だろう」フレーベル館 1978年 40頁
18. 大場牧夫・海卓子・平井信義・本吉圓子・森上史郎「これからの保育一2 「自由」とは何だろう」フレーベル館 1978年 283頁
19. 同上 283頁
20. 文部科学省「幼稚園教育要領（平成20年告示）」フレーベル館 4頁
21. 大場牧夫・海卓子・平井信義・本吉圓子・森上史郎「これからの保育一2 「自由」とは何だろう」フレーベル館 1978年 239頁
22. 大場牧夫・海卓子・平井信義・本吉圓子・森上史郎「これからの保育一3 「課題」とは何だろう」フレーベル館 1978年 247頁
23. 同上 250頁

A Consideration of Set Nursing and Free Nursing in the Kindergarten Education

TOBITA, Takashi

There seem to be two ways in play in the kindergarten education, set nursing and free nursing. Free nursing is considered to allow children to play freely. Restrictions must be few — place, time, dangerous action, trouble with other children. As it doesn't mean to let children do as they please, it is regarded as planned education.

Set nursing is to make children play along the teaching plan. Teachers make a plan of contents of play and they actively lead all children in a class for a period of time. But some people have question about this method. Doesn't it contradict children's voluntary activity in Course of Study for Kindergarten?

This study is to arrange and consider these two ways.